

18
17
16
15
14
13
12
11
10
9
8
7
6
5
4
3
2
1

B

M

櫻

品

下

別置

和装本

二奴

710

2

0 1 2 3 4 5 6 7 8 9 10 11 12 13 14 15 16 17 18

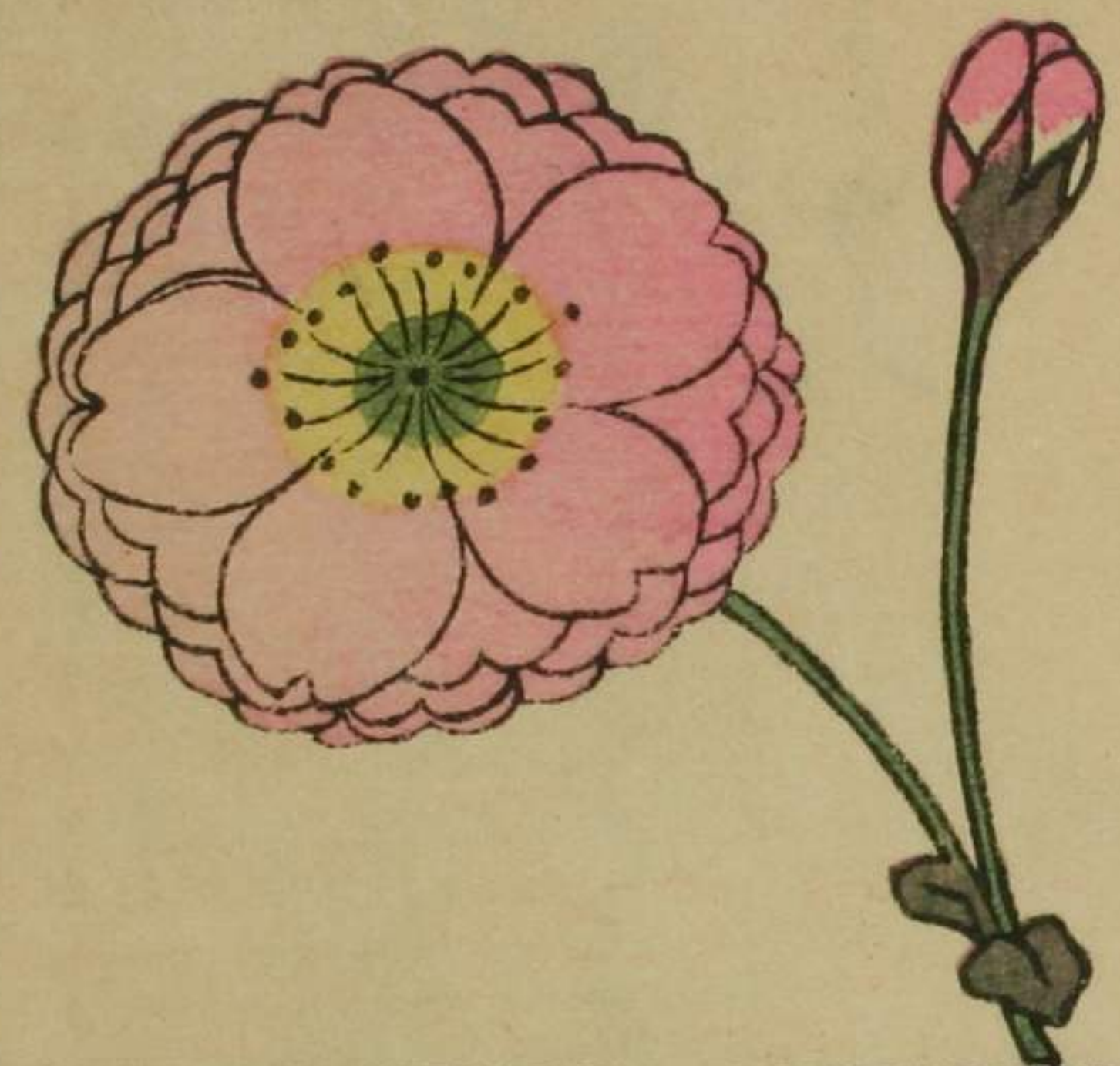
JAPAN

TAJIMA

目録 14
716



法輪寺



法

根文

○怡顏齋曰江戸の上品
あるもの也重瓣大輪を
同く幸に江戸より選
重なる厚く茎長し
け花の茎短きその致
則大に望むといふ大江戸
と法輪寺の全一様あり

五二一

花師も辨ぐしと云江戸の芝長くしと
 咲初はこまの太宮おく開放く落ぬし
 輪の厚く花辨まきこ花まき
 とりふ

江戸法輪寺



江戸法

眼文呂

○怡顔齋曰法輪寺
 何ぞ丸豊田あり重
 厚きさる江戸より深
 茶も又厚し大あそ
 弁し是の武加法輪
 ありやうあ也又別
 法善寺美水山有君と

五十二

つよものありとつりたきありは別この
 江戸法輪も也別種もありは一か二名
 あり但江戸櫻よ大抵あつたも江戸
 の花辨くはんとく江戸法輪もいふよく曲豆
 足

櫻ろうま間ま櫻ざくら



櫻

眼文

○物類齋曰花小江戸の
 櫻相似く重瓣也うらやよく
 形あり小江戸よりきま
 短く花相谷の花形を
 相谷より小輪こりんと但相谷の
 八重一重やい交り咲櫻ろうまの
 皆八重あり江戸を櫻間

二種とも小相谷の爰アハ化カは樓間ロウカン元仙洞ゲンセンドウ
 淨所じよじよより出るとも則すなはち後水尾院ゴミヅビノイノの末あり
 仙院せんいんの樓下ろうげのる小相谷せうさくの實じつ以極いごくと先
 孫まごふ故ゆゑふ樓ろうるを号なづ今いま聖せい護院ごいんを連つ院いん
 及び及び堂どう上方じやうはうの沙さ屋いふ多おほく其種そのしゆを極ごく
 接つぎぐ士庶しぢよの家いへふも漫まんり今所いまじよとあり
 又清水しみづ谷や殿どの寺てら殿どのは一株いちぢゆ樓ろうるの實じつ極ごく

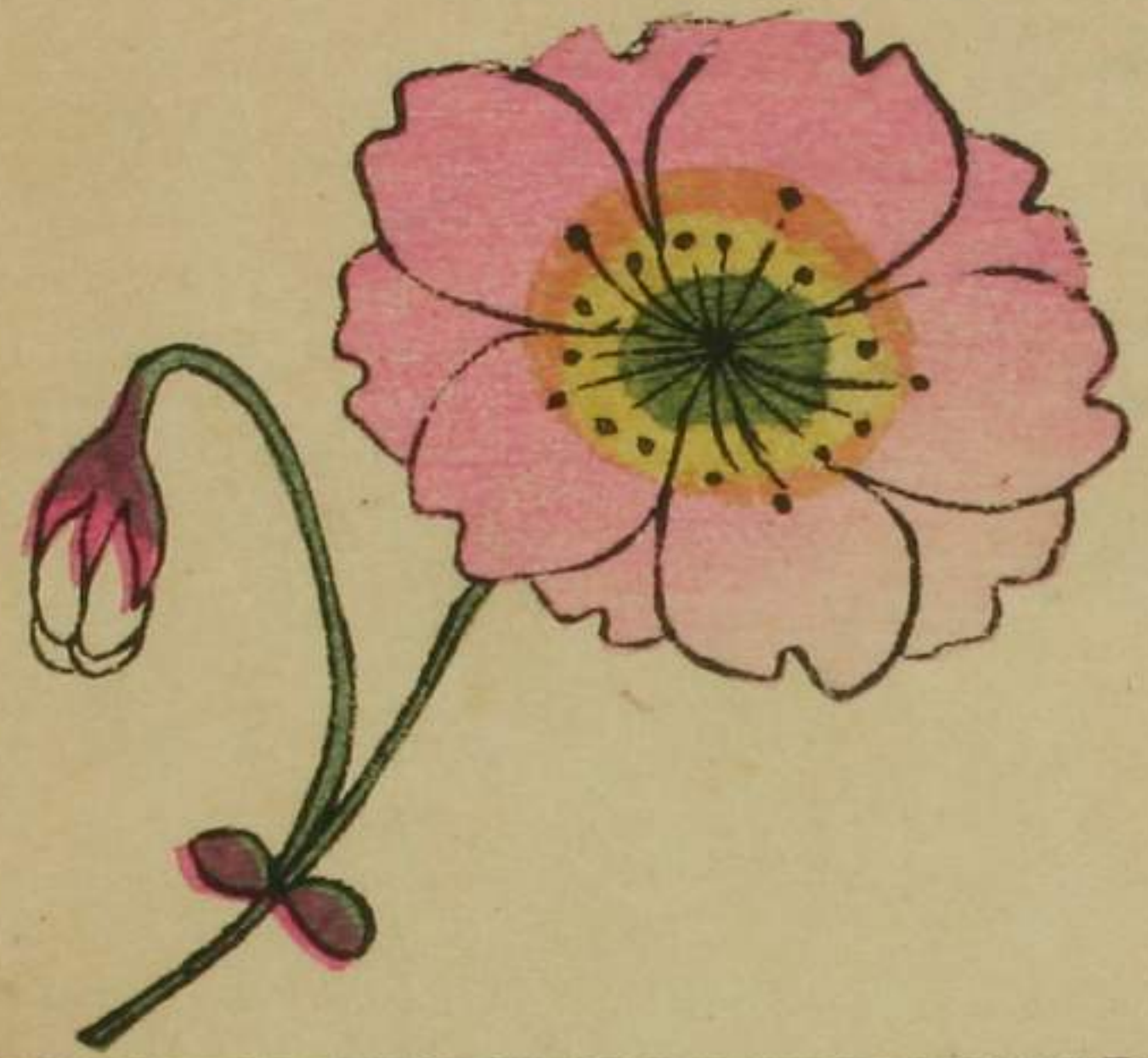
ありる目め較かくふと早はや雜ざつふく花形はながたの海うみ
 堂どうは似にたりと樓ろうるの爰アハ也別種べつしゆありと

海棠櫻 ふどうざくら



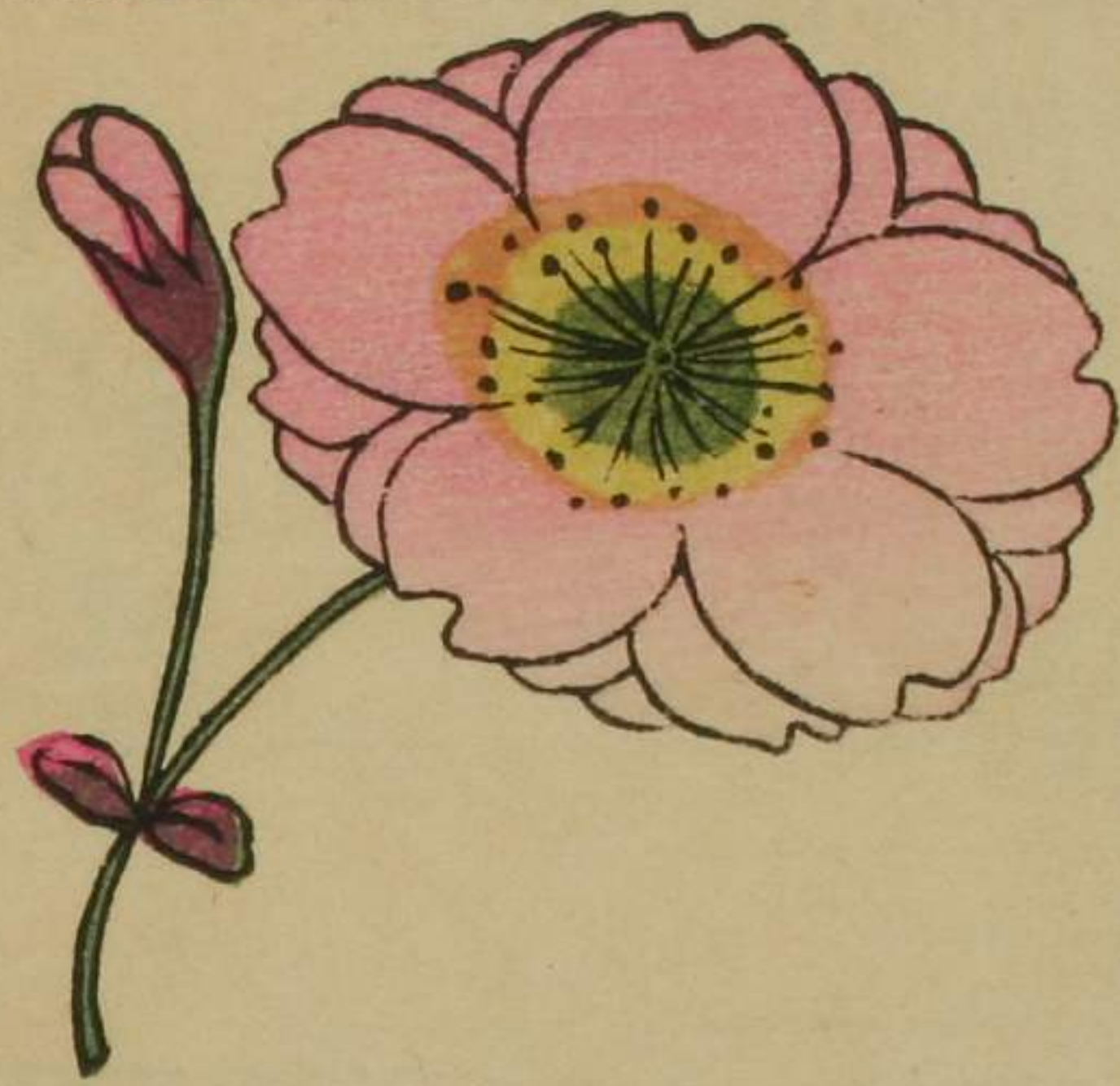
○怡顏齋曰花相谷よ
日色^{ひいろ}のりて海棠^{ふどう}
の花^{はな}は似^にたり又櫻海棠^{さくらふどう}
といふものもその様ふ
ありに附録^{ふろく}ふり

子午櫻 しごのざくら



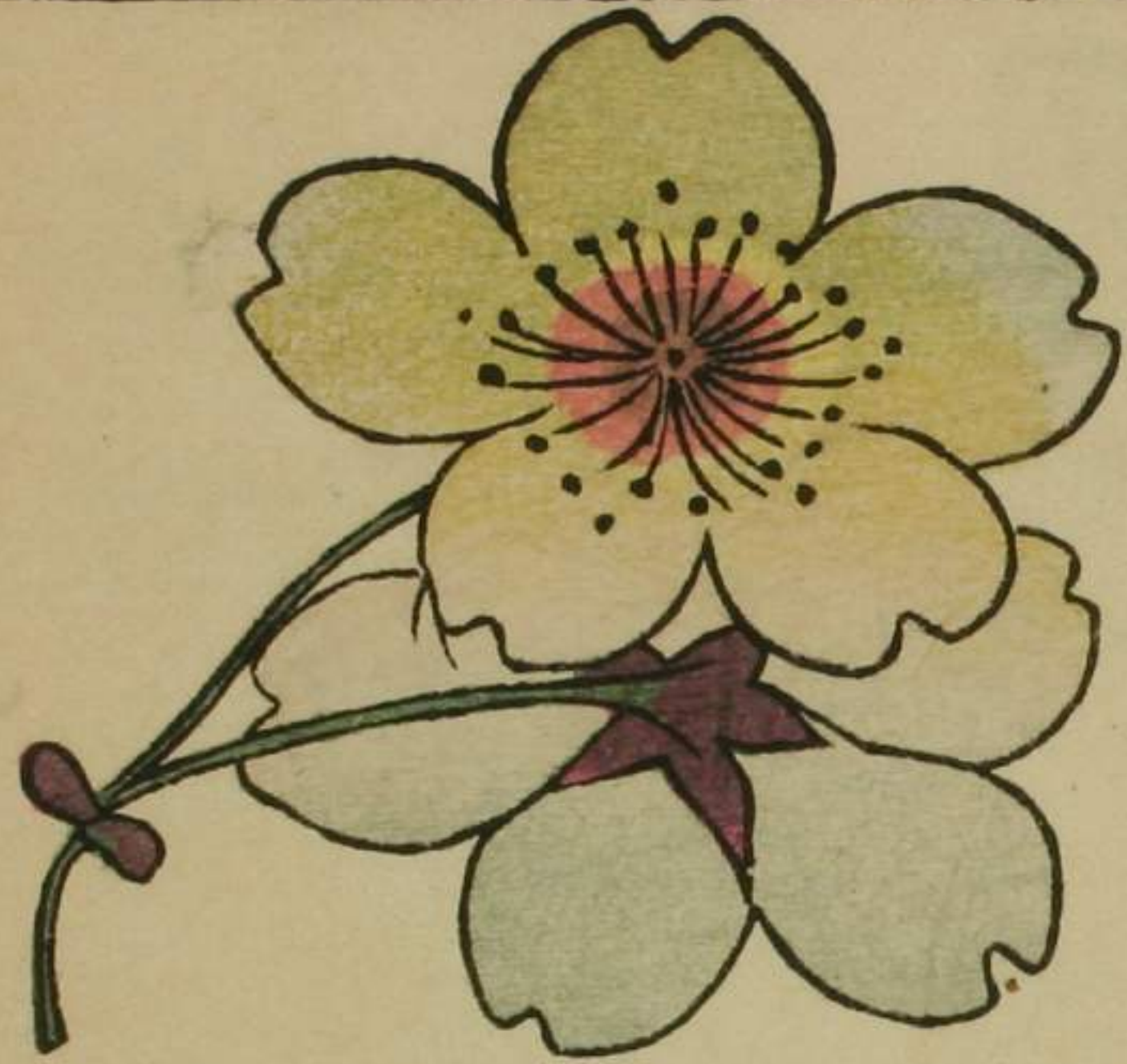
○怡顏齋曰芳野^{かうの}及
芳山^{かうやま}とてふし子午櫻^{しごのざくら}の
一本^{いっぴん}は花^{はな}はよ^よいあ^あは^はに^に較^{かく}あ
をりみ今^{いま}ある^{ある}は^は圖^ずと^とり
一品^{いっぴん}也^{なり}花^{はな}は^は八^{はち}重^{じゆう}あ^あで^で微^{さい}
あ^あり^り花^{はな}形^{かたち}相^あ谷^や小^{せう}相^あ
何^{なに}く^く少^{せう}小^{せう}

九重櫻くわいのゑんぎょう



○怡顔齋曰花形相若
中ヤス日ヒづくハ重かさねあししく
かかしし重かさね多おほききものものあり
故ゆゑ九重くわいのととりり

浅黄櫻あさぎのゑんぎょう



浅・樺

眼名

○怡顔齋曰花相若の
大おほききああししくハ相あいい合あひひ同おなじじの時とき
ああししくハ早はや辨わ白しろ色いろととて
甚たききくく緑き色いろとと花はな真ま真ま
黄きいいああししくハ花はな辨わ甚たききくく
映うつりりくくままるるくく見みるる也なり是これれ則すなはちち
緑き甚たききくく紫むら系し海棠たいよう也なり

様櫻ういざらけ



○怡顔齋曰花形相合
 小似よく重瓣やえなり舞合うご
 多おほく瓣はなびらなり花はな色いろ黄き
 根ねも云い様うい系ざら色いろ之の依よ
 淡あわ黄ぎ根ねと淡あど
 淡あ黄ぎよいあらは

様櫻ういざらけ



○怡顔齋曰白しろの
 本もとと云い其その皮かわを乾か
 炬たき火ひといは雨あめ中なかあま火ひ消く
 どお花はな滴たけ煙けもも新あら画え
 をあ薰かくく古ふる天てん豆まをあ似に
 幸あ本もと州しゅう彌や目め小こ足あら
 唐からよりあらら半はんらら

樺皮の引く甲別及信の加飯田をい
皮瘡腫れを瘡と事めく樺皮散と

又

○花水曰花單の白色へけ木の皮松物
工多々く用武苗ぶぐはを吹順和名おま
樺和名加波又云加仁波今樺皮有之
木皮名可以為炬者也と云かんむりか小む

にゆくとニと通じて字六らゆらひ紫苑の
まをゆくと云新かむといかゆどの中里也

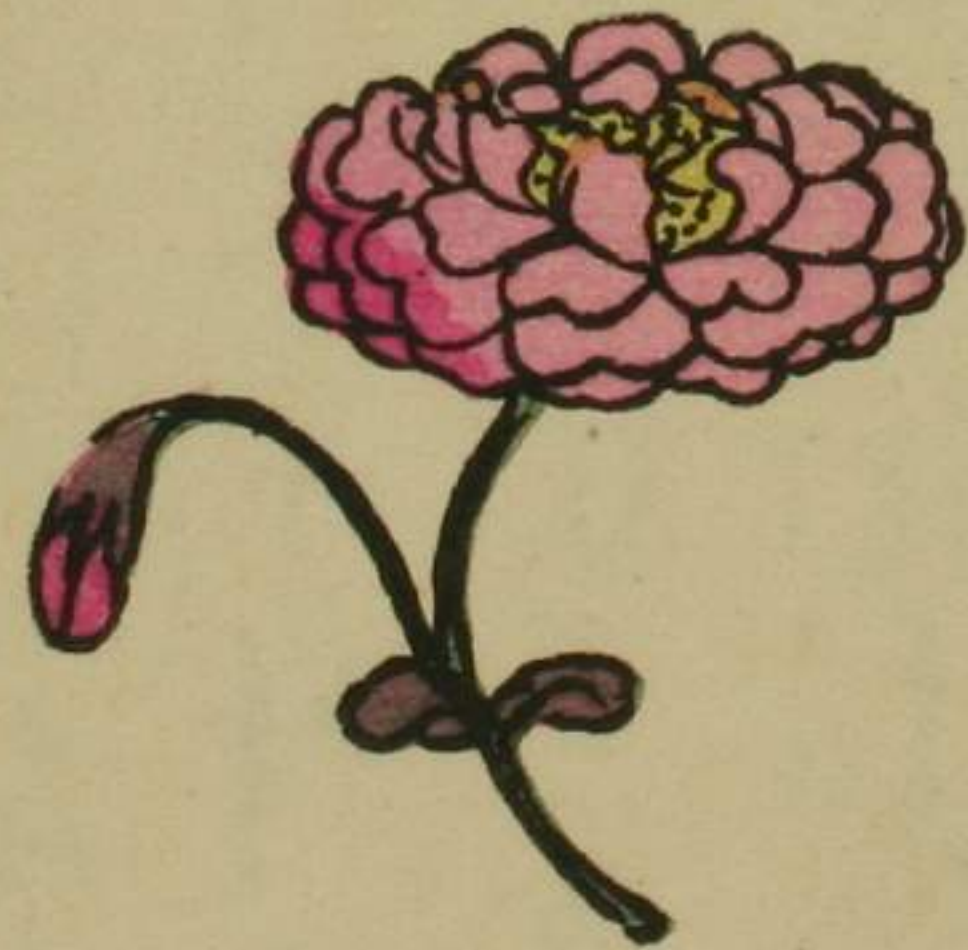
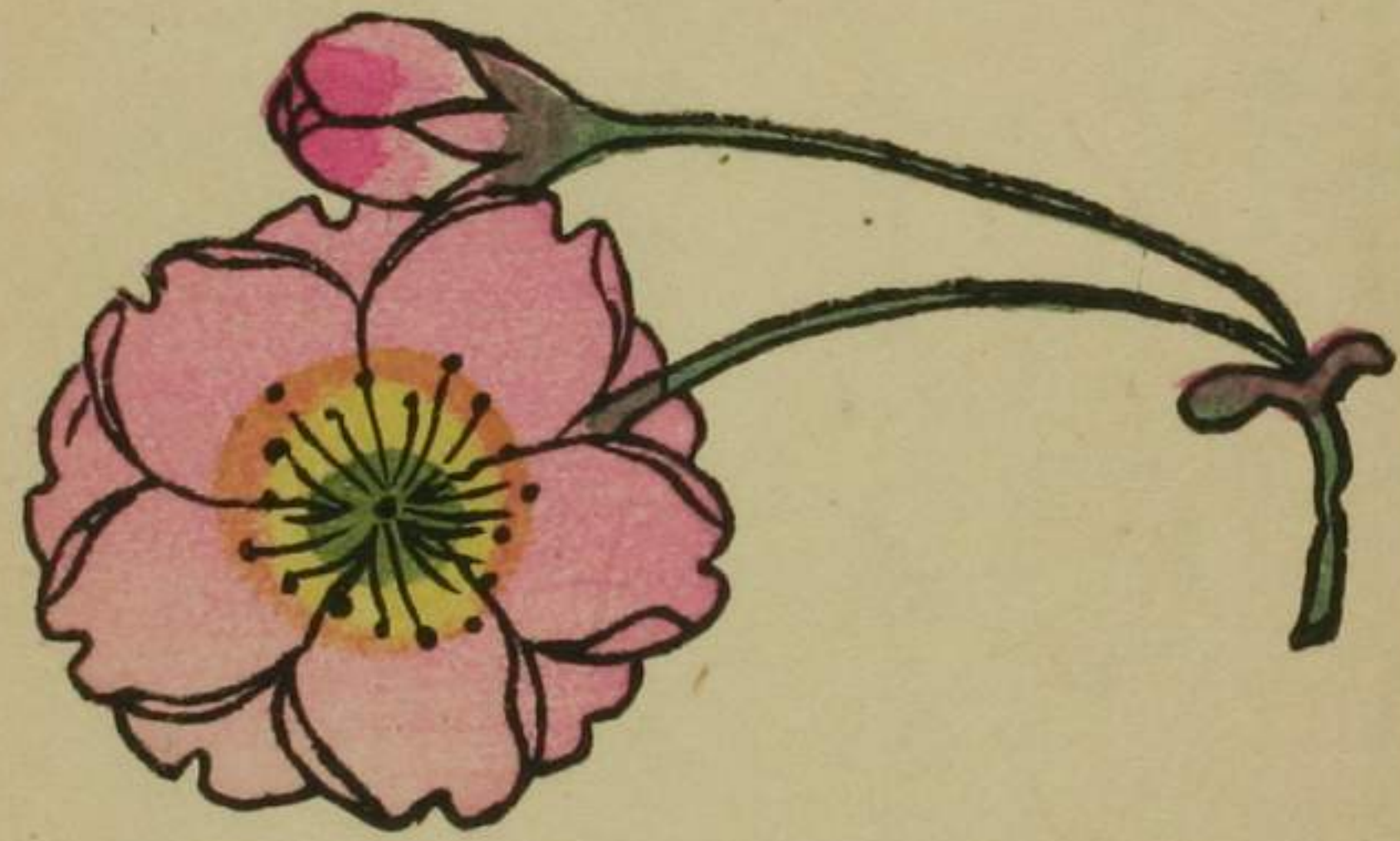
文本集

仲正

こそこのゆら白かき樺皮うら
らりのかきゆれお花は

楊

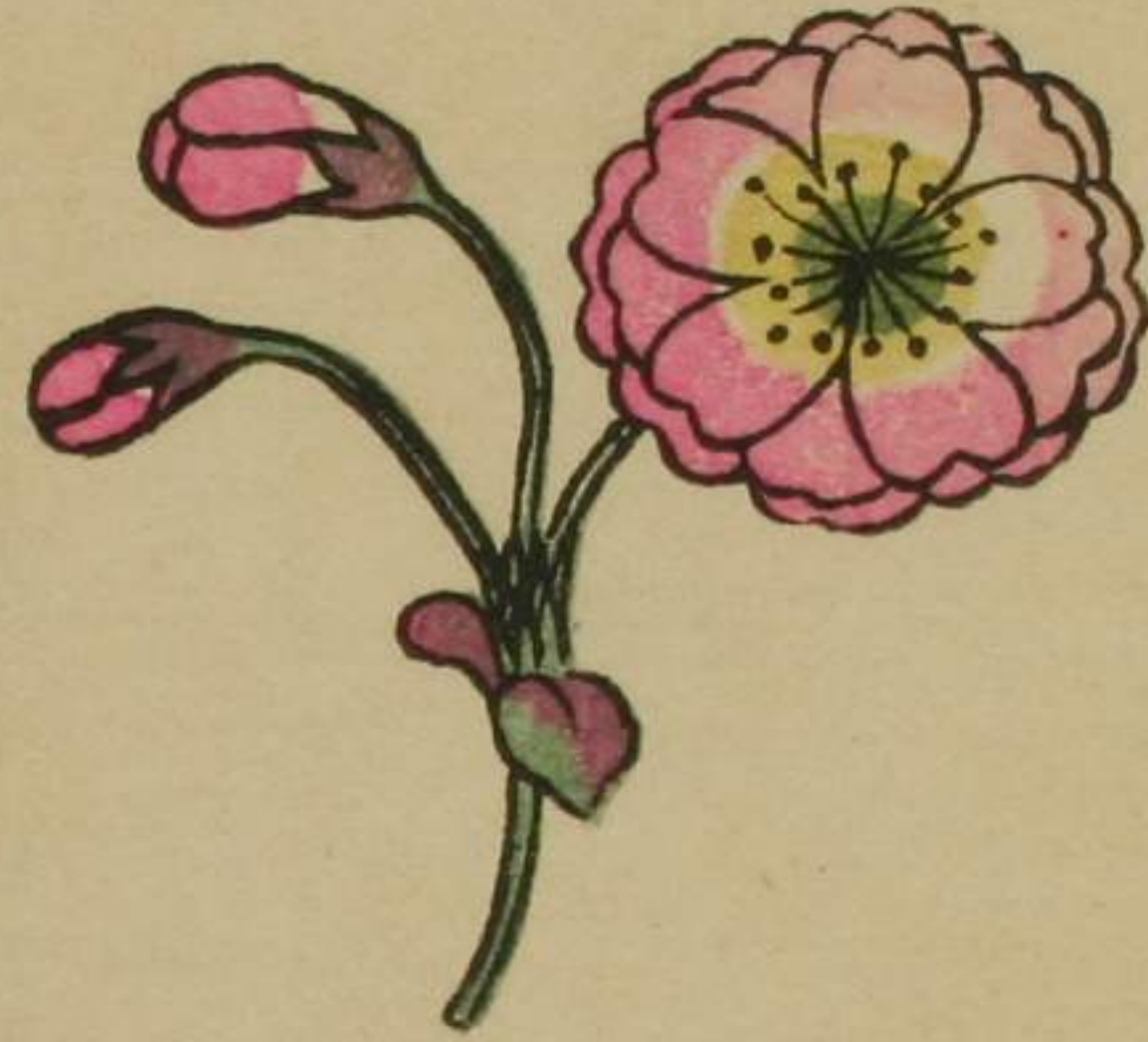
妃貴楊



眼
口

毛

凡紅



櫻
品

五
十

○忙顔齋曰小輪重瓣
あはれ花辨のさげうと
あはれ花辨うはく
まきとの也凡さねふねを
さうたるごとく切る

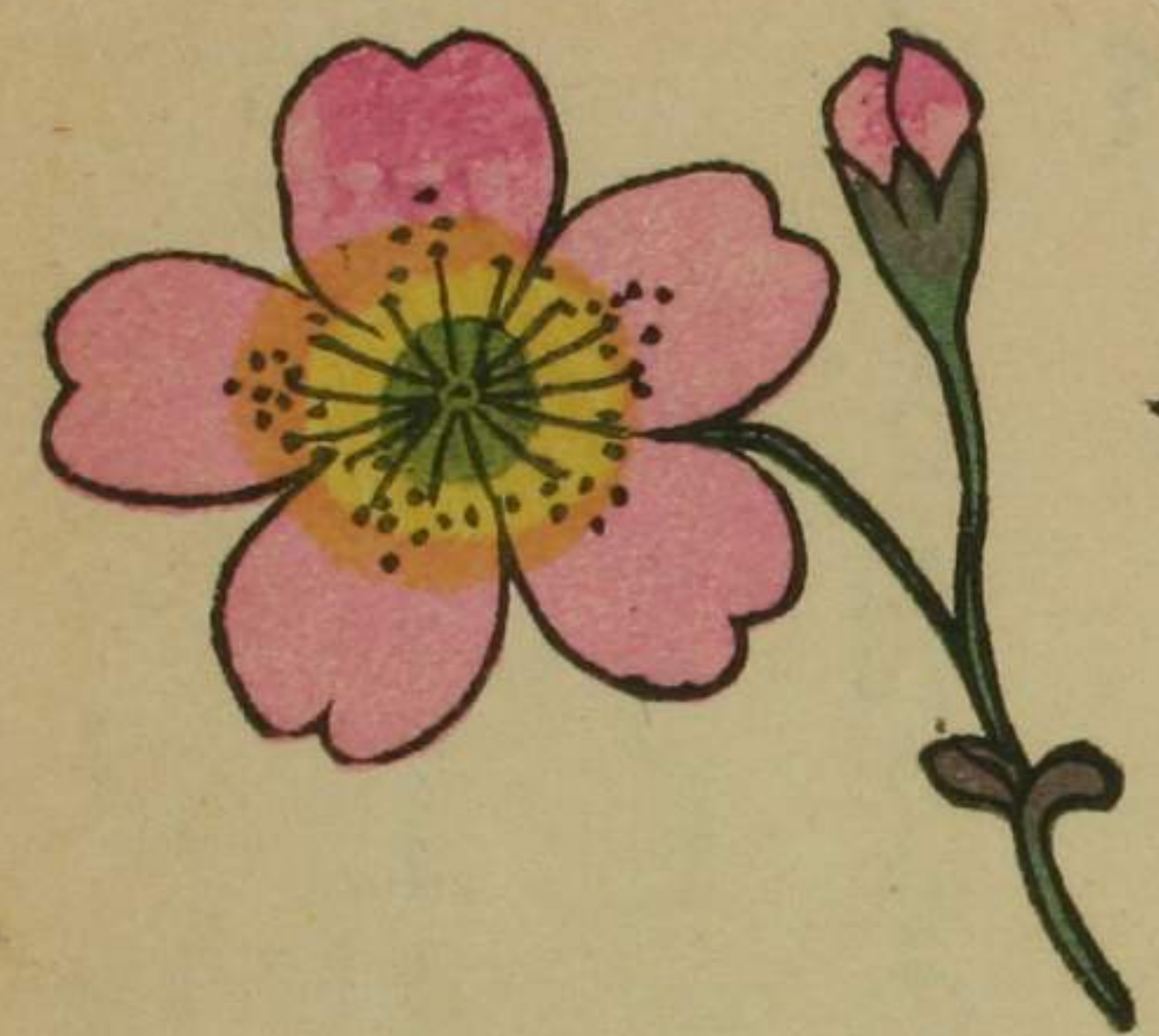
○怡顏齋曰小江戶小似く重瓣中輪也
 花瓣の底あり先白く又江戶の底白
 先ありそはもろく分つ又早瓣の
 おありそは為あり是は羽根とあり
 又系括といふもの能あり併揚も花
 少くもそそく茎短く碎色也是即
 碎海棠也命どく系括の種とありて

○重なる茎長く又花は花周ふも楊も花の
 全花様とおかしく花様より小輪あり
 千瓣の為あり花は味も甜く小葉は
 つるごとく花の赤く園とくは白
 お早も花は花の底の白く同くは
 しらもちく中小ありまるとは一名二種也
 ○活所并櫻譜曰大旨相谷あり

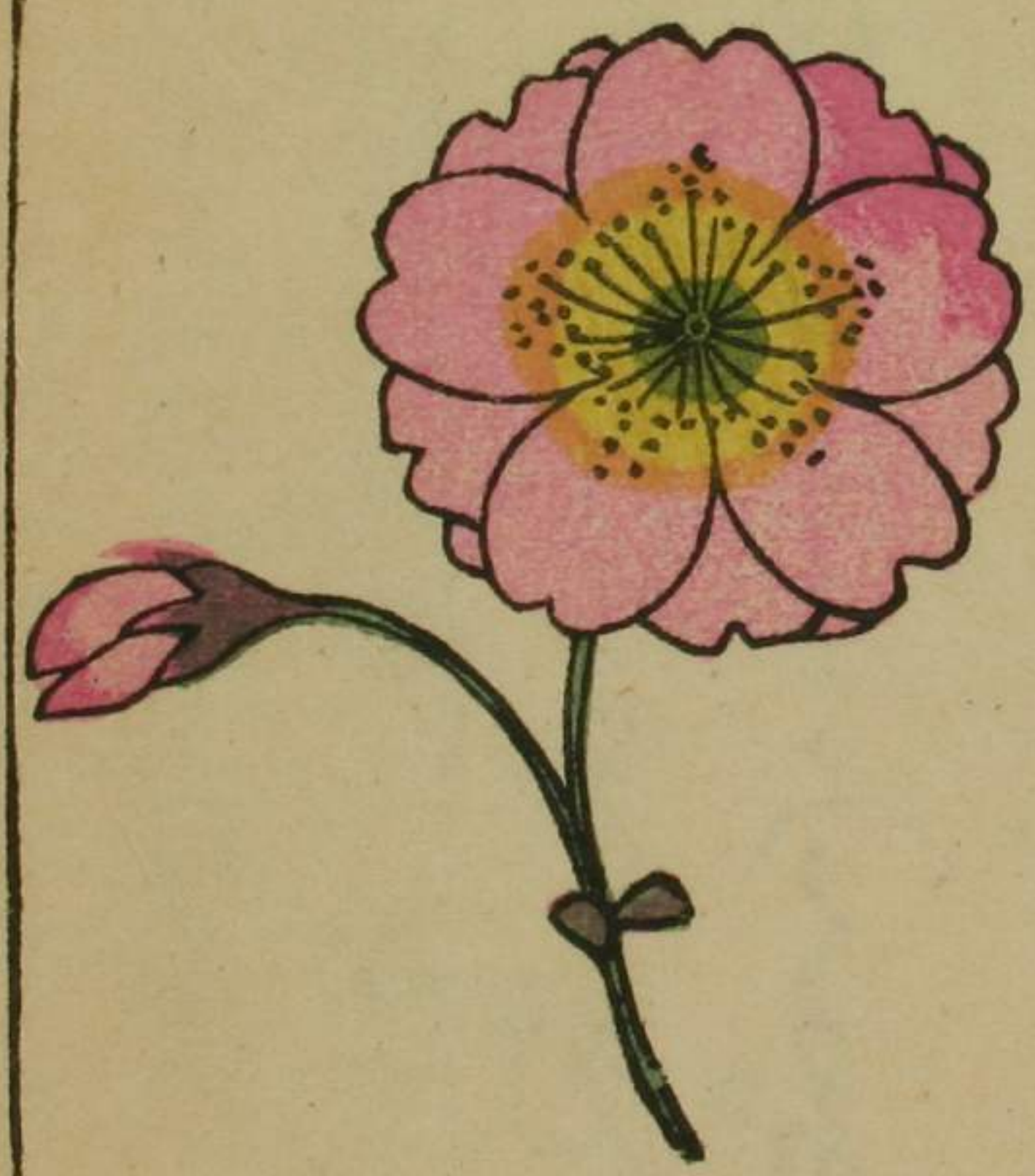
嬰女口

有

櫻



有明櫻
單



重

櫻

重

相若ハ八重一重也楊梅ハ八重中ハ
其異トクニ

○怡顏齋曰單瓣ひんのりく白色大輪あり
 又重瓣やえもまゝ是則江戸の種も於一押おへ
 但し江戸よりとせしわおされしあつひ光ひ
 わりくまの月つのさつふふままくく名な
 くら

球たまご
 櫻ざくら



○怡顏齋曰千瓣せんぱんゆりゆりかかしし落らくおお小こ端たん也
 けけ大だい端たんのの糸いと括くわくととりり即すなはち糸いと括くわくの
 種類しゅるい也

○活所かところ糸いと括くわく護ご曰いふ奥おく州しゅうよりより出でるる其その形かたち状じょう
 種しゅののここととくく花はな白しろ少すくくくみみくく花はな用もちくく幸さい
 諸しよ様さまよりより進すすくく

糸括



糸

櫛目

六十一

○怡顏齋曰一名大平球てまりと云干瓣せんぱんなり
 大輪一処よよ二三十英花えいばな損しん簇くくてまりの
 おくうす花はなをを淡あわく

提灯



提

提灯

二二二

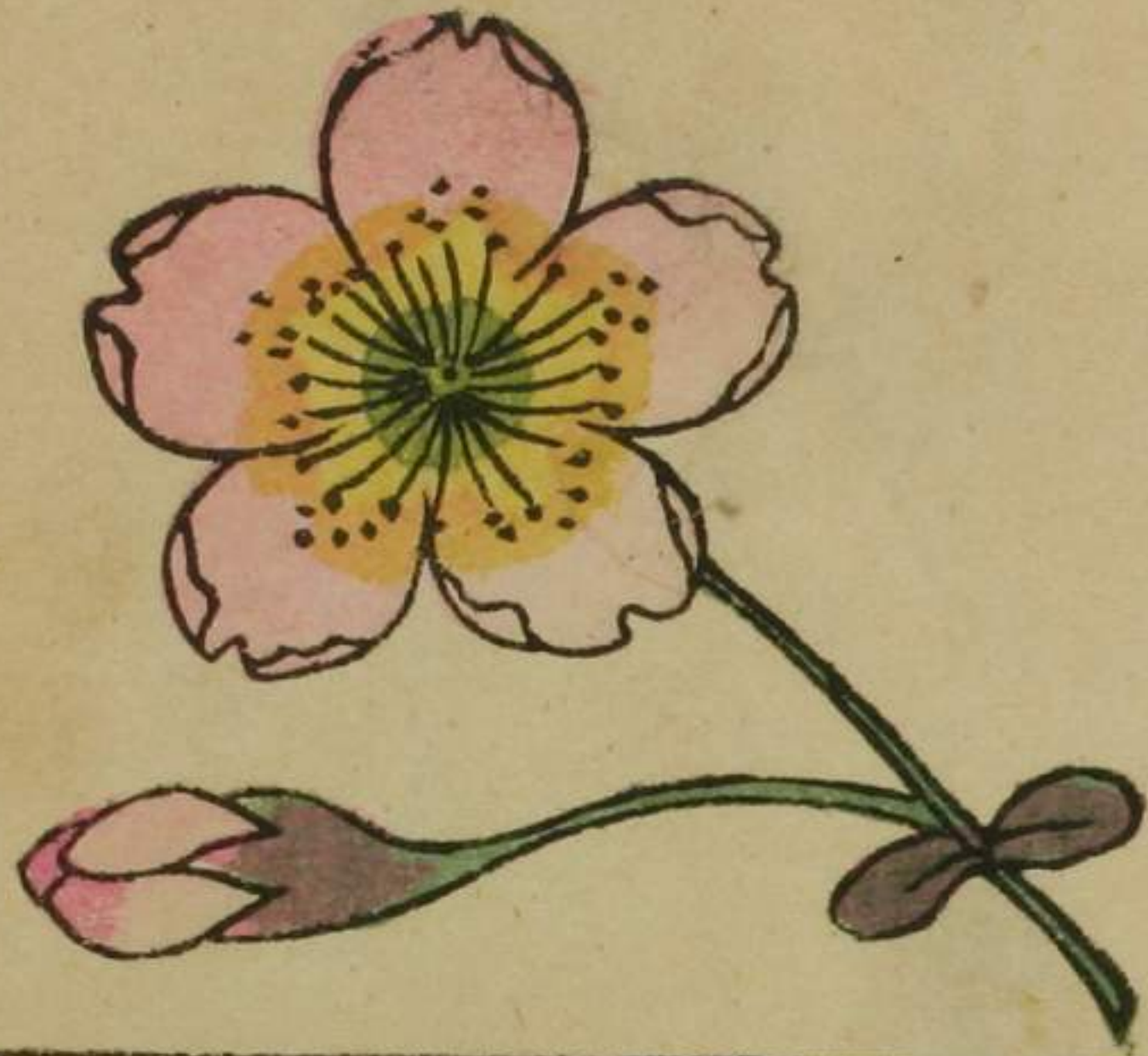
○怡顏齋曰十瓣白色枝の頭よ攢り
 重信昂大^{てまり}の枝と^{あが}なるものあり
 ○延永曰花形ま揚り^{あが}又^{つが}各のさ^こに濃く
 開^あく一^さ海^うく^こ四重大^あ輪^あり^の
 是又丈櫻^あ灯^あと^り

五所櫻



○怡類齋曰（えんるう）分瓣大端（ぶんぱん）一苞（ひと）より又英（えい）
 一處（いっしょ）より集（あつま）る仍（いまだ）く名付（なづけ）目（め）息（いき）より連（つら）系（けい）括（くわ）
 の類（るい）花形（はながた）相（あ）合（あ）す知（し）る

照君櫻（てうくんざくら）



○純永曰（じゆんえい）中端（ちゆうたん）よりハ大
 みく（みく）單瓣（たんぱん）也（なり）花（はな）瓣（はん）尤（なほ）
 廣（ひろ）く石（いし）子（こ）一（ひと）茎（かき）長（なが）一（ひと）
 楊（やう）毛（ま）肥（ひ）よりハ色（いろ）少（すく）一（ひと）
 濃（こ）く艶（うら）々（ら）あり
 古（こ）老（らう）曰（い）昔（むかし）櫻（さくら）をぬ（ぬ）く
 武（ぶ）家（け）より秘（ひ）伝（でん）あり（あり）類（るい）より

春のついで何ありと智るものせんといひ多きぞ
 たあふ秘苑の櫻一掃と智るんといひ
 既よそは日本まう名所は行そ玉照殿
 胡園へそこれ一幸はおとし物く是は
 名所はなういほくうくは備とぞ

永日櫻ゆひひざくら



○花類齋曰千瓣あり
 いろあつくうきさき
 おひさし永日氣馥郁あり
 小輪めで花味と感
 け香気かさきの細柄
 盛ふらものこ

純いざな櫻うら



○怡顏齋曰或ハ火櫻小
作あつこ純いざなも火も赤あかのあざあり
干せん瓣はら小こ輪りん少すくく若わ長ながく
垂たるるががふふららららととままちち
其そのおお也や用もちくく色いろ澄すみみみく
紫むらさのの菊きくはは甚た似にたりり又
毛け中ちゆう似にくく白しろ少すくみみ暈うらをを

ものけいらい花い園えんはは揚たかりりとと云い蓋けし一いつ類るい
二種也

夫木集

躬恒

秋あき氏うぢをを焚たきととハハ山やまのの隈かたよよ
ううととらられれをを并ならのの火ひ櫻うらのの一いつもも

標品

三

夫木集

信實

梓うまの山もふくやうり
りやともんぬ火揉の花

新六帖

光俊

夕陽日うりふきや迷へん
も根よとて店火さくくね

さうま いざさ
薩摩紙櫻



薩

嬰品

○怡顏齋曰薩摩小
紙揉といふものも名
はよく花形大異薩
鹿兒島より琉球へ生
乃ふみらの尊と云ふ
も花ハ正月上元最
成也と云ふより芽とま

六

標品

花重瓣の梅に似て思ふに花も梅も
 皮も全株小異るなり一は種東山泉涌る
 悲田院ひでんいんより花もども花末はなごころ点ちりと暖国だんこく乃
 本京地のなき地へ移したる故本長せ
 ざらものく京師の細梅とい別種あり
 予悲田院小過く目撃めがなり



重尾

虎

眼安品

梅占

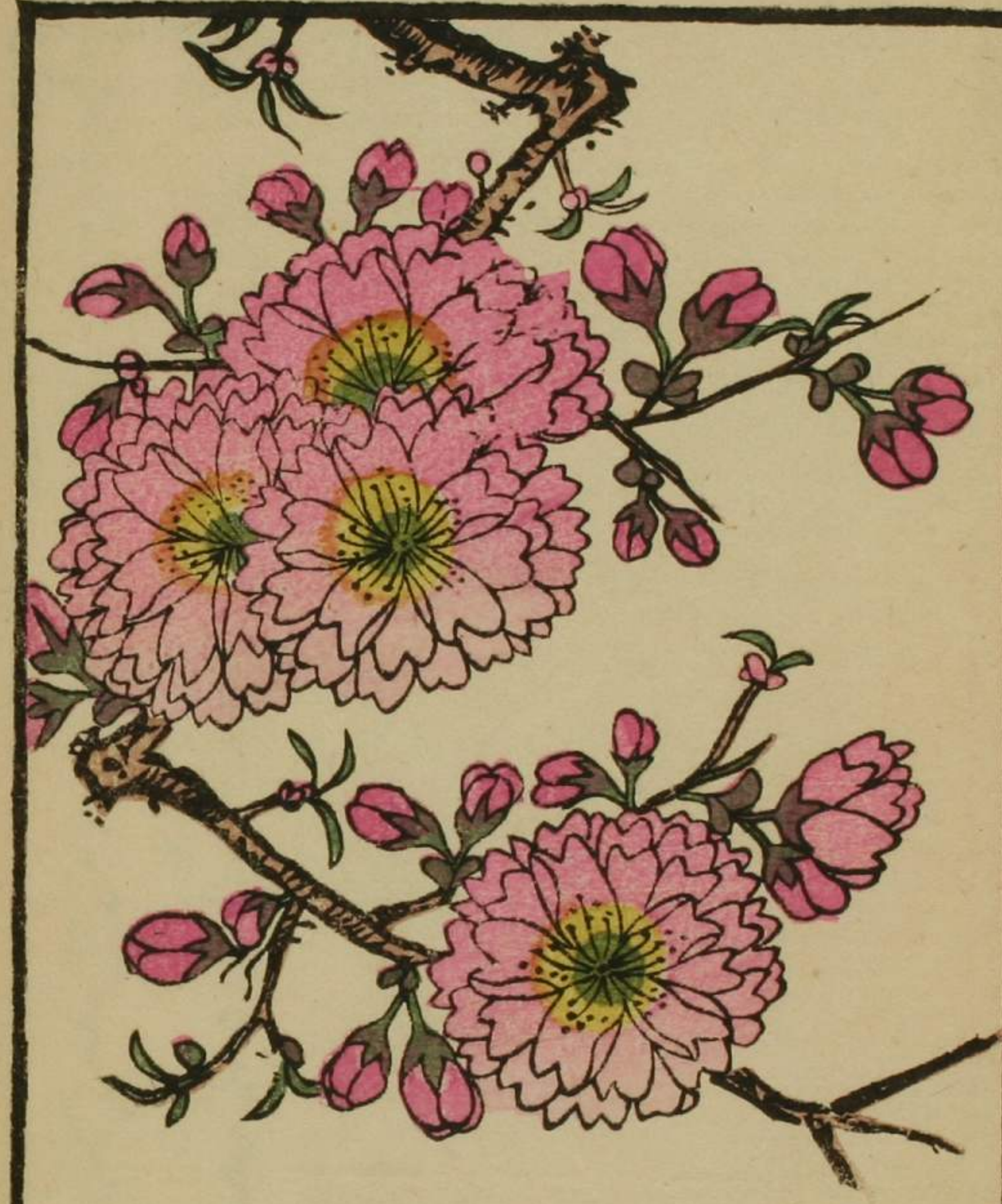
○怡顏齋曰千瓣せんぱんを枝小窓えだこゝろとて咲く
練まのぎく、枝曲折えだまがひなり、花開ひらくるかるる取
逐とし、是則麗枝海棠れいしこうぼうと稱なづべし、花ハ
泰山たいしんと曰い但泰山たいしんハ枝小曲折えだまがひありて花
疎小貼そせうてし

○活所翁接譜曰相谷小おふし微こし
赤あかし枝長えだながく終つひまましししし疎そあるる取とり

○虎尾こびの斑あは入いりり似にたりり枝えだももつつくく名なををん
○純永じゆんえい曰い又またおお虎尾こびととししものもの花形はながた
虎尾こびふふりりるるかかしし只ただおお色濃いろあお
あり

泰

嬰安呂



君之府山秦

○怡顏齋曰全虎尾よ切が但枝曲
折ありと枝小相はらふつと赤まよりり
疎小花貼一枝の間断續しと一所よ
攢に秦山虎尾一種ありと分は

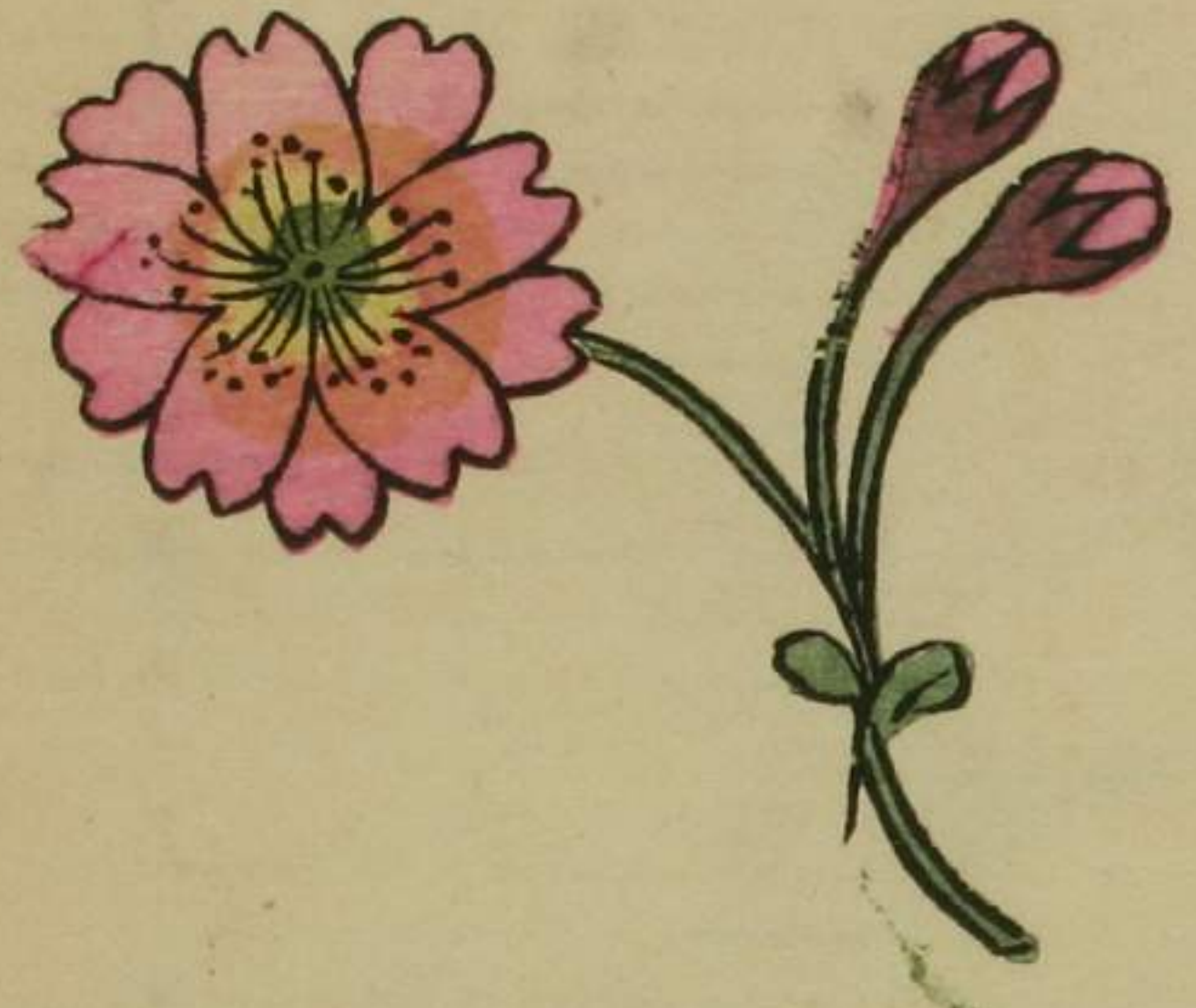
○活所翁接後曰千瓣もく少く赤く
大輪のく紅梅のく紫の稀く小
○延永曰秦山府君の源平成堂裏記小

いそく櫻侍中細言こまごまは花のらうり教日をよん
ふまゝのばうめいそま中山府品試まらありと
こ七日の密紙ふちのぶらうとそ

子早振現人祚のうまひら
花のよまひい延ひよくらうら

万まん家け佳けああもも花はなののささうう七しち日にちいいららととよよめめり

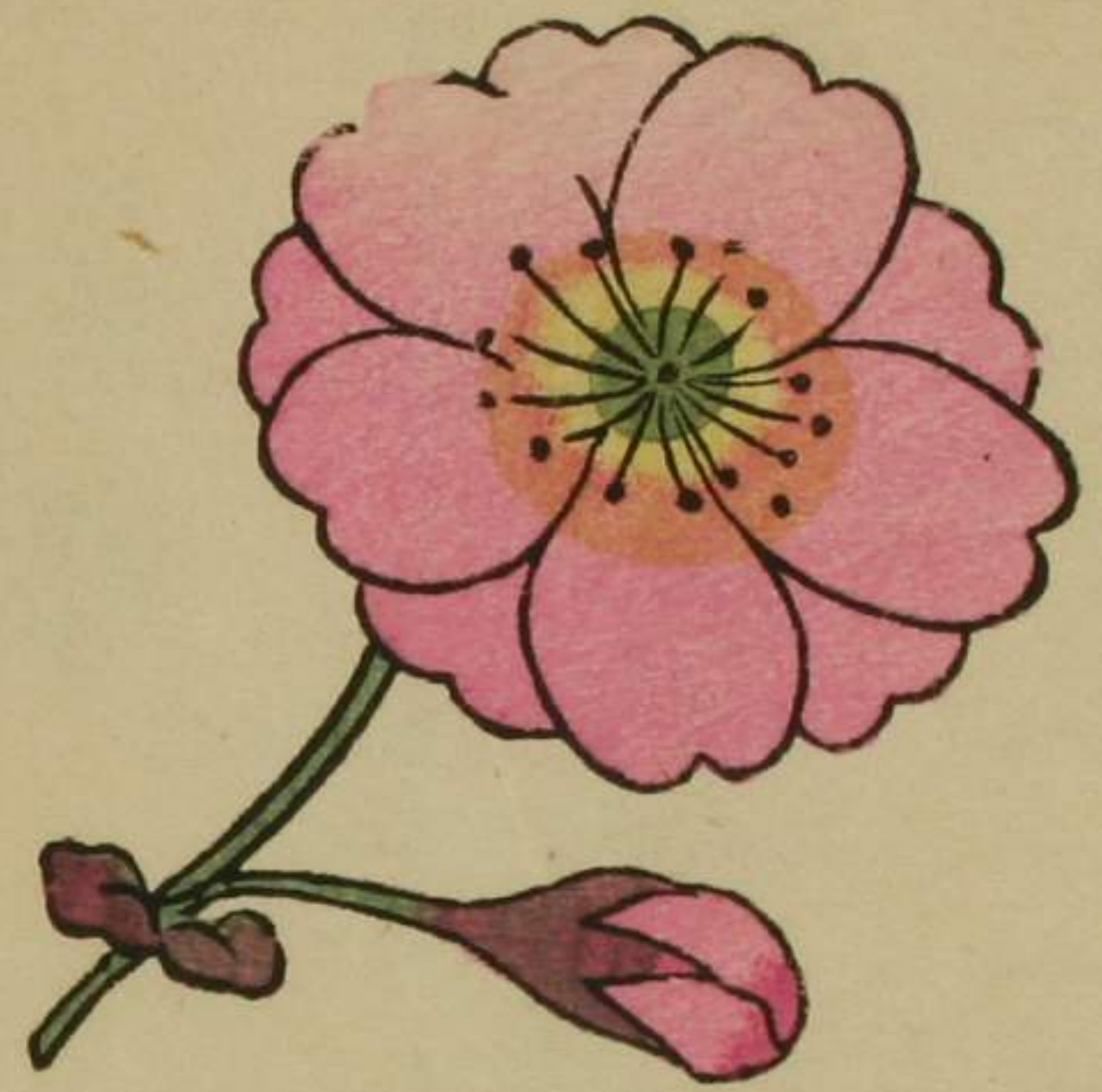
真ま櫻おう



○怡や顏げん齋さい日にち重ちゆう辨べんみみて
花はな辨べん細こまいい虎こ尾び小せう似にり
系けい地ちのの伊い勢せ振びとと日にち時とき
ああららううくくここ

櫻

外山櫻 とやまざくら



○純永曰大瀧ハをかり
但彼小弁山の櫻さくらは
けりといふいふ只ただ小弁の山
櫻あり是小園といふは一
品あり

廿三

暁櫻 あけぼのざくら



暁

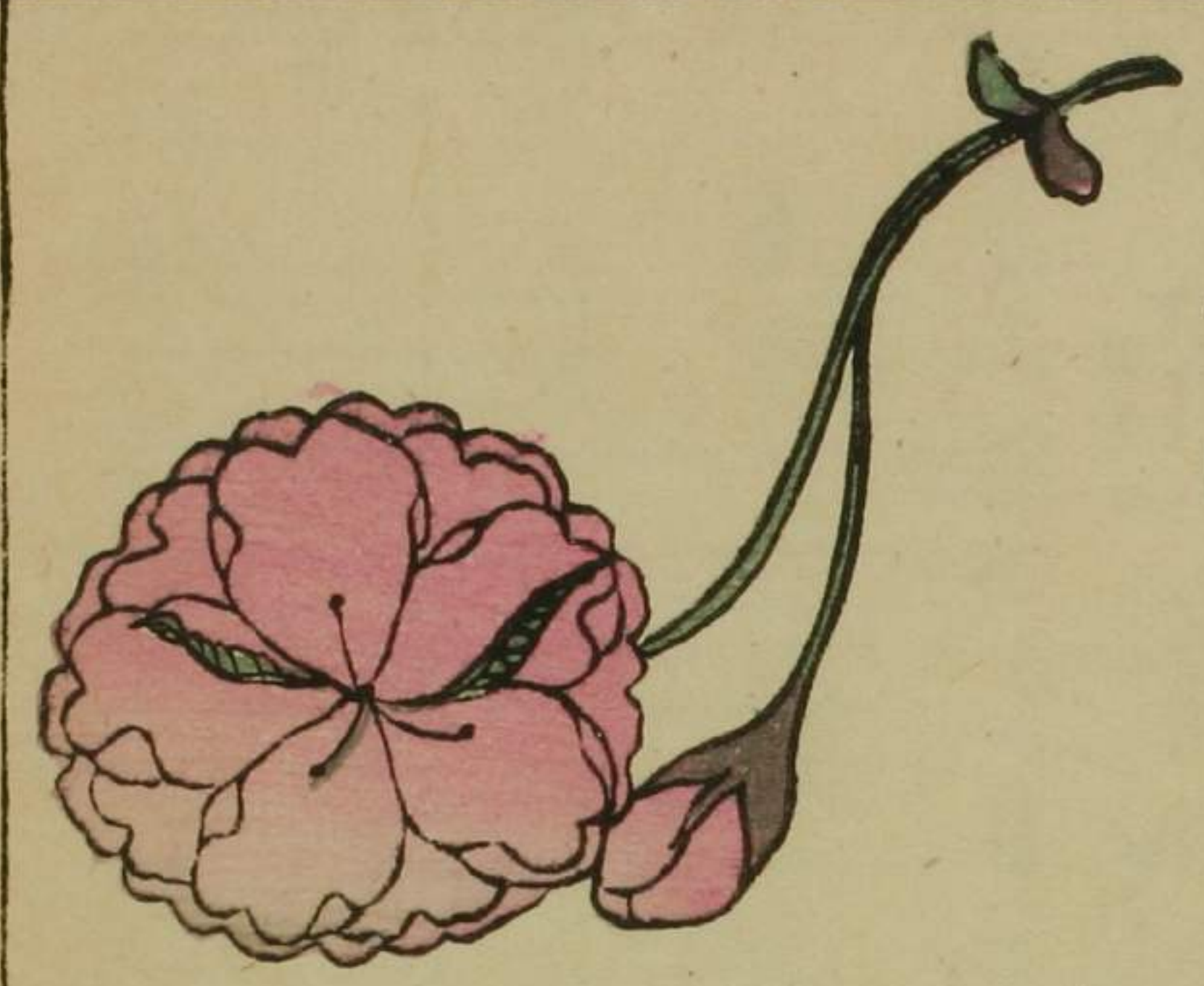
櫻

廿五

牡丹

○牡丹曰重瓣めど大輪也あまく大花
その二三寸余あるも花はな瓣はな廣ひろく落おちしき
細こく長ながく葉は短みじかく色いろ楊やうきく尻しり小こ日ひのり
わらわらふらりと曉あけとと又また明星めいせい櫻おうしもりふ

普日ふげん賢けん八はち象しやう



普

嬰えい名な

○怡い顏げん齋さい曰い千せん瓣はなりて
五六輪りん一いっ妙めうよ密みつく貼は
花はな甚しん張ちやうど若わく長ながく葉は
色いろ赤せきく花はな中ちゆう葉は終しゆう
一いっ節せつ二に節せつありく葉はの
芽めののどど如ごとき葉は色いろ紫むらさ五ご六ろく
分の長ながののまま芽め二に三さん箇かん

三二二

花辨の向ふ雜く出た形をむとてはぶ
 づ〜奥州仙臺をてくれを奈奈の様と
 つふ系師あ〜奈奈と〜あら大様のもの
 ○活所系櫻譜曰垣電あ曰〜但花
 中ふ二葉の出是具異〜花白鼻紫葉の
 畚〜象鼻出葉の意あ〜若者賢象と
 り

○花水曰あ花周ふりあも大白千辨
 流〜びやび花中二ツのゆあ〜
 象鼻のご〜或人云け花茎長〜
 下へま〜級若も賢象〜と也

犬櫻



○怡顏齋曰本如くも常の極よ似く
 小花の族生し徳はみん花は銀色か
 名は即一石奈六式ハ上溝とふ
 但南殿の極の中里口ちとんと見得るべ
 かは別也け犬櫻の實六月小熟を
 其色黄赤く味は杏仁小似るり
 好食のその極蔵し酒をさる料と

木品

ふと諸山しよ中山ちやう小多せう一

夫木集

俊頼

山やま陰かげ子こ疲つかささふふつつるる大おほささららくく経けい

とひもさしりく

しく人もさしり

眼まなこ佳よし夾くわ夕ゆふ櫻うめ



○花はな永なが日ひ大おほ燈とう灯ちやう小せう似にく
榮さか長なが一いつ重おも石いし一いつ葉は号ごう
薄うすぬぬ一いつ花はな一いつ下したくく花はな
おどおどここののどどくく切きわわりり取と
うう右みぎ月つきくく取と重おも重おも辨べん也や

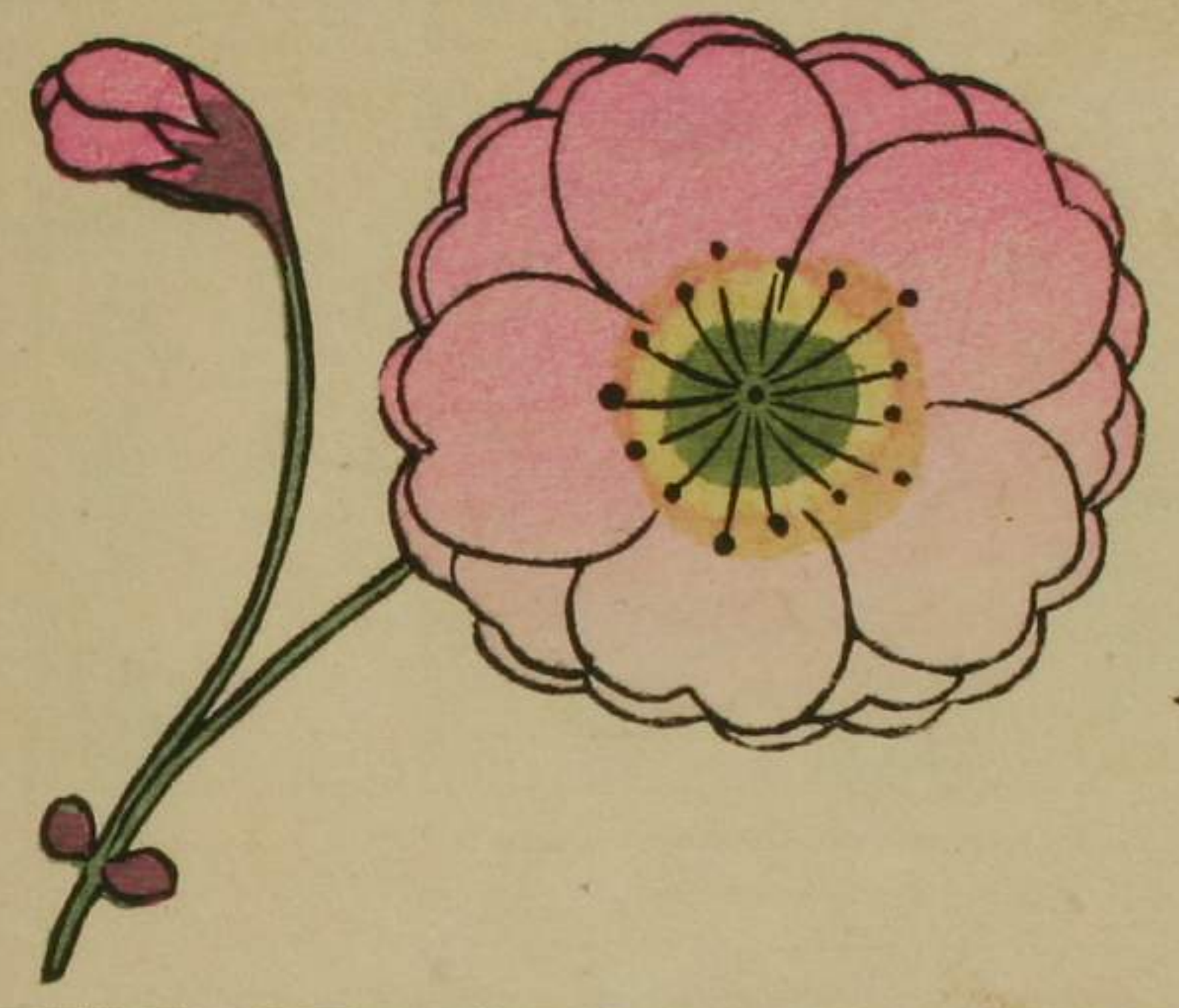
瞿・鳳

眼まなこ女によ口くち

三

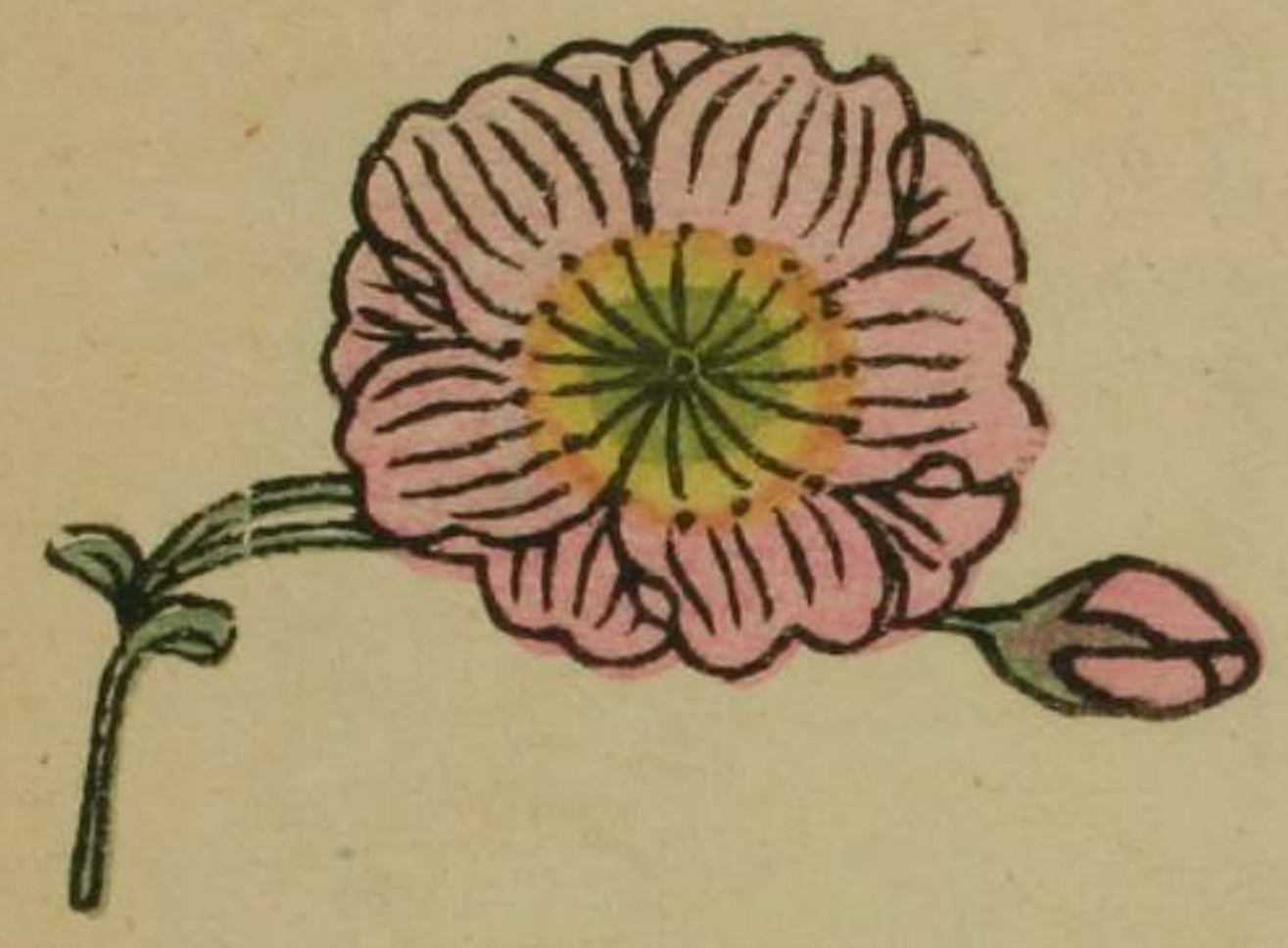
木品

鳳來寺 ほうらいじ



○此水曰三瓣少と色
為ふく瓣廣く大輪
茎不き長くけさる冬
石少とけ所より種付来れ
又宝来寺少作る

鹽竈 しんがま



○怡顏齋曰重瓣少て
花と葉と雜り出あり
小輪めく花形志がこ
く付ごとく花瓣よ敏
あは故志がこく付やふ
んる牡丹の志遠ふといふ
このよは花おし葉らる

鹽

木品

木品

標品

華え中ちゆうを小こしとんまぐりていふいふを少せう光くわう号ごう

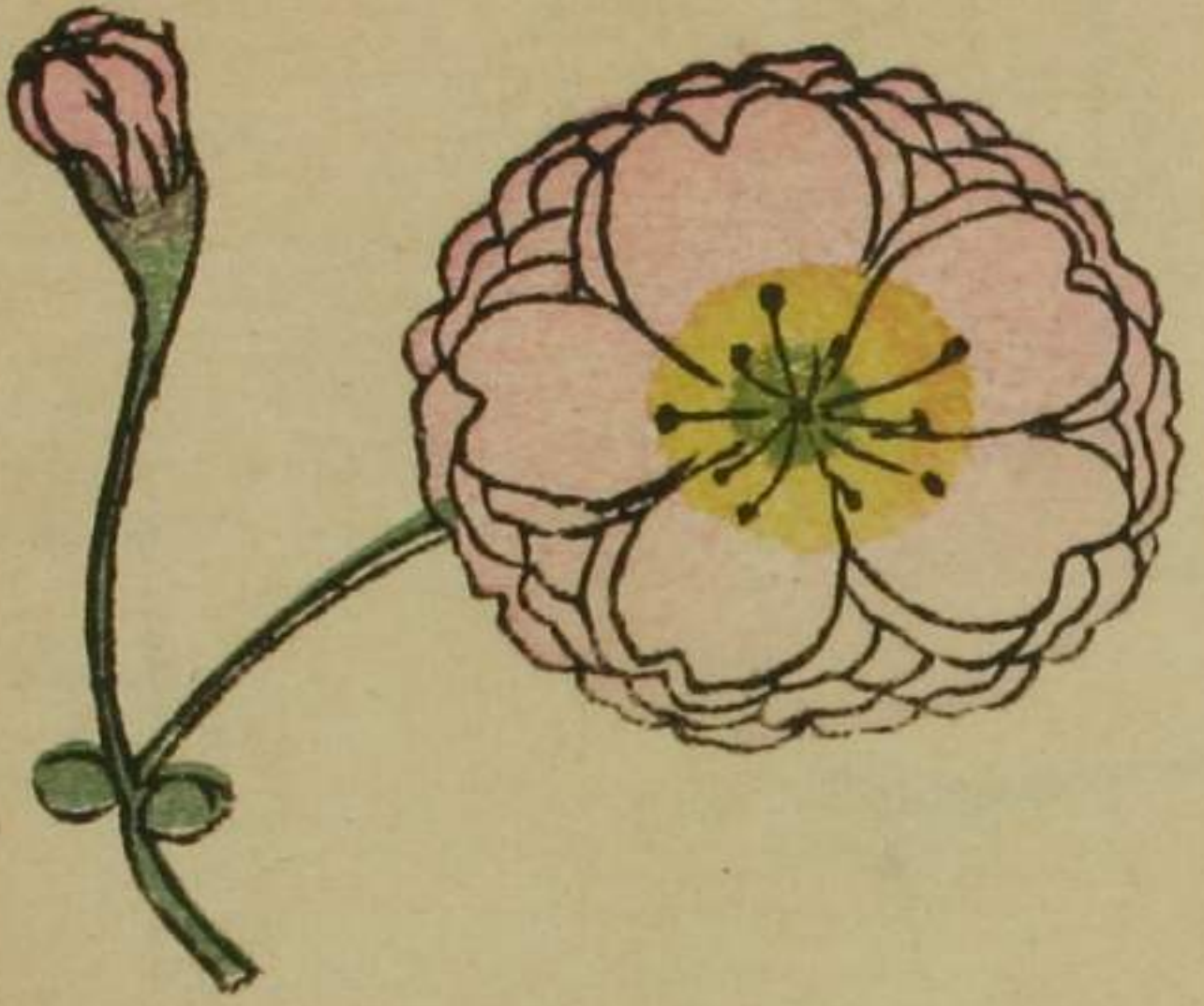
○活所くわくじよに花はな櫻おう譜ふ曰いひ重じゆう瓣はなゆゆく小こさ

○花はな永えい日じつ美み云いひ花はな周しゆう小せう云いひ中ちゆう白はく干かん瓣はなゆゆて

浅あさ紅こう紙し常じやうしし嫩なほ細こ微ゑい黄わうゆゆくく絞しやくりりと

ありあり目め息いき長なが也や

名嶋櫻なしまづくら



名大

○怡い齋さい曰いひ万まん瓣はな粉こな紅こう

中ちゆう痛いたありあり葉は骨ほね葉は小せう丸まる

万まん瓣はなありありととののくくけけ名な美み

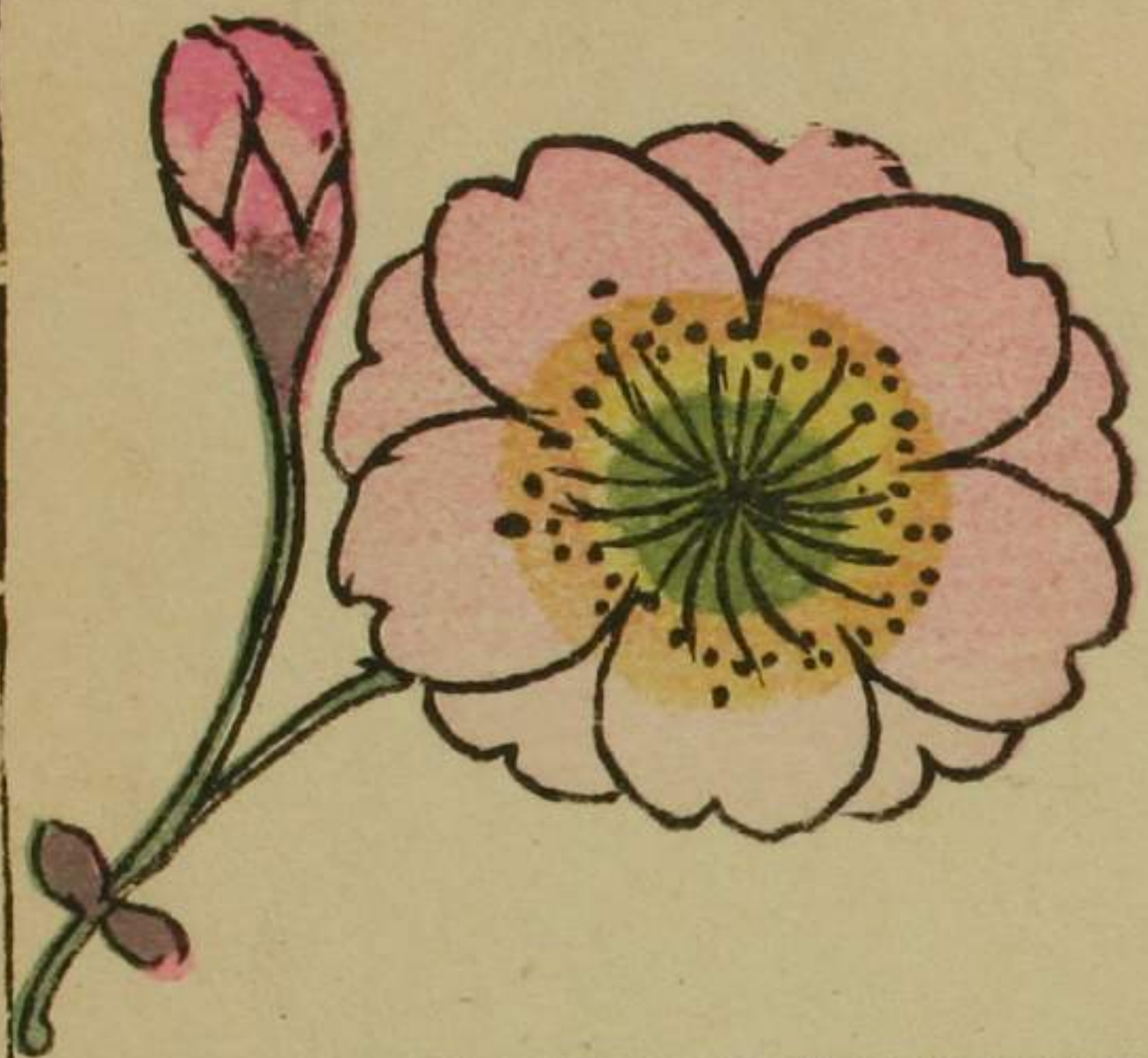
未み詳じやう

大膳櫻



○ 徳永曰風もさるより
 少く小く色濃お
 茎長く花辨先細
 千瓣也花山吹の花形
 少似らけ名義詳み
さきくちのちゅうりやく
さくらんぼ

伊勢力櫻



○ 怡然齋曰重瓣ありて
 濃紫色赤く花辨
 の中のえ白く
 ○ 活取翁標譜曰色
 おりて尾張小らうき
 花
 尾張小らうき
 伊勢と号

○佐頼齋又曰活所の説せうわま誤りくけ花開はなひらく
幸を早はやし彼いかん名系なけい様よ次つぎ相あひ合ありも
早はやし武人ぶじん云伊勢いせかといつるい赤あかきの義ぎと
うぢよりまさこ宇治頼政うじよりまさこのうご飄ひょうも

伊勢いせ武ぶ者もの有あらる皆みな純じゆんびの禮らいままく
宇治うぢのあどろよかりくらうちあ

は縁えんとといつるい是こゝ又また附つ會かい早はや依いのたり
あまら按あよは振ふ州しゅう伊い勢せちいはら住ぢゆう古こ伊い勢せちい極ごく也
いせ庭ていよは極ごく種しゆ也

風土記

伊勢

つらつらもまに山里やまののさくらの心こゝろ
よそのらりあんあ後のちよさらあま

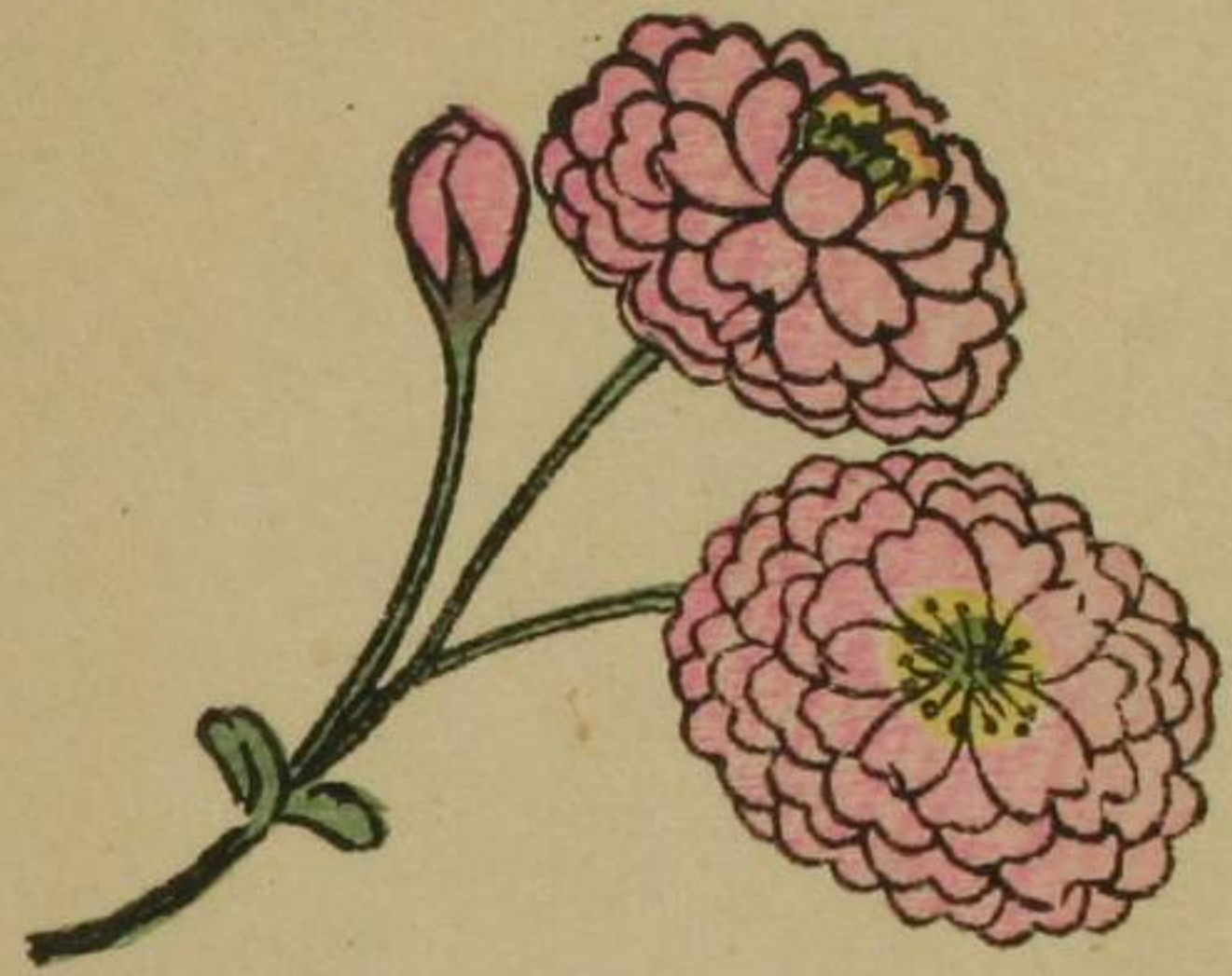
奈

観音

の

標品

奈良櫻



標品

○怡顏齋曰八重標也
 花小輪くわのく甚いやさくく
 とさ赤あかくく茎こゝろ長ながくく神かみ
 伊勢いせ大おほ神かみがか終はつののりりくく
 奴事ぬじののままのの存ぞんとと氏うぢ
 ○銘なづ永ながいいくく法ほ補ほ
 袋ふくろ竹たけ子こ小こ上かみ東とう門もん院いん守しゅ美み

と申まをすす時とき伊勢いせ大おほ神かみととめめくく糸いとのの八やち重むら
 櫻あざみ式しき人ひと進すす之の伴ばんのの花はなをを伊勢いせ大おほ神かみとと恥ちままくく
 比ひのの紙かみ淨じやう硯えん紙かみああよよ糸いとののみみ
 時ときよよ人ひとのの目め紙かみ紙かみとと見みああつつ古ふる子こ
 硯えん引ひききとと書しよとと御おん堂どう殿どのとと比ひ沙さ徒た
 ととららふふ

嬰品

嬰品

いみじきの奈良の都の八重とくら

ふふ九重小白いぬるこの都

とら名目當日志昂妙ある契万人感

歎一宮中報報とととと又日 沛時

南約南園堂のあ小丈ある八重様一本

あり天下の名花をいふをとととと真福寺

別當より作と林の庭へ移し極めんとて

既より引時小なり僧徒等あはは怒り

たらひ罪状清くもけ名をいふは取人

やととととふ合々ばけしや中院まの

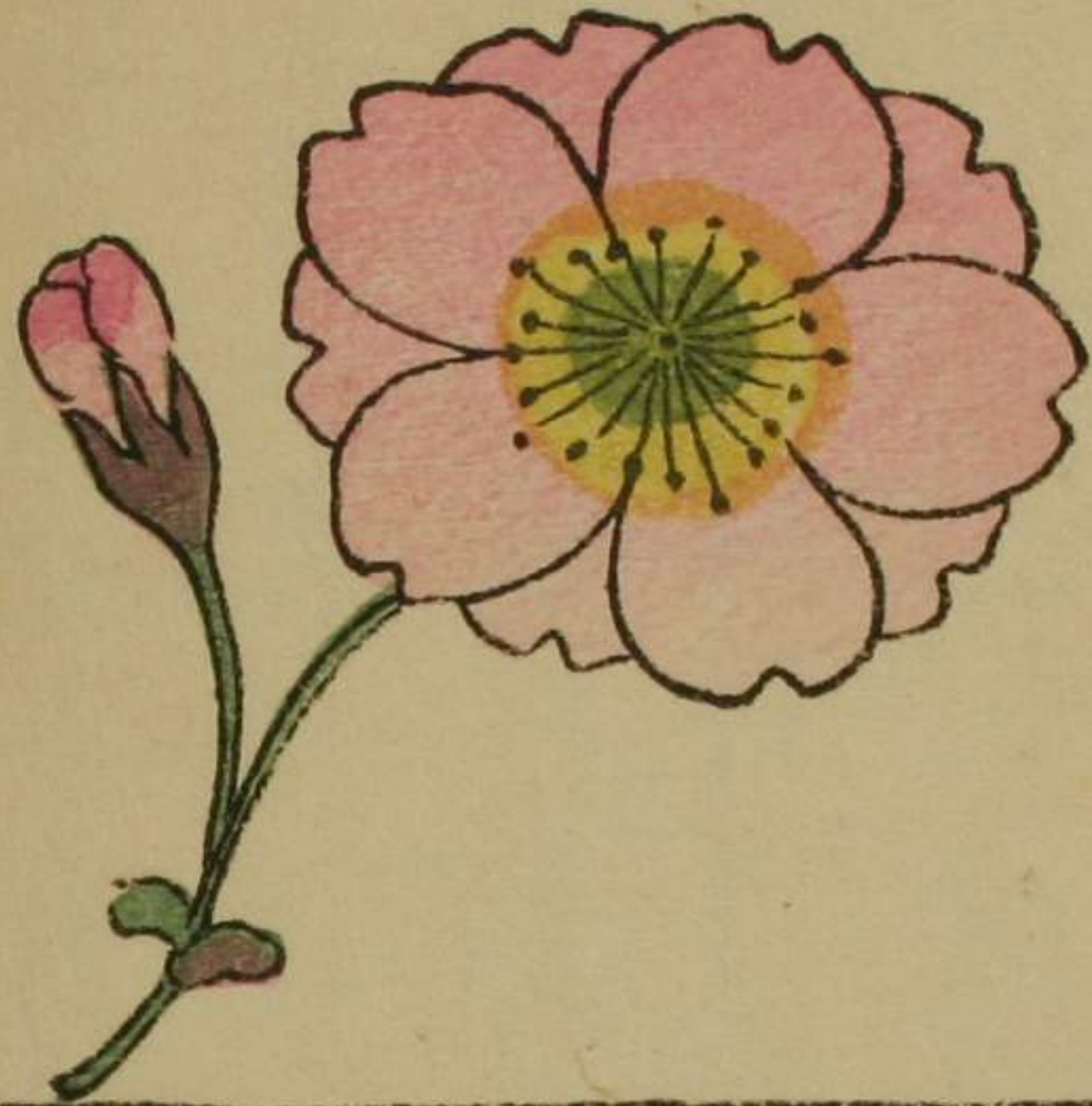
衆徒の心をくいとやけりと感じさせもい

休賀園の野店をとせととと花のはの宿

夢を付すく皆らふいぬ

遅

遅櫻おそざくら



○怡顏齋曰花桐谷の八重少く少くちひさく色少くいろちひさくぬく寒さむ渥あつのさざら管くだ別わかまのび諸花もろはな小ちひ後あとく同くまのさ並ならみ後に月しん新樹ぎよをとふらと合まち紫むら深かきの生な花はなをと

不斷櫻ふだんざくら



○怡顏齋曰一名若木わかしき梯はし一名せら皆み會あ梯はし一名あん十六日じゅうろくにち梯はしと云い梅うめ皆み十六日じゅうろくにち梯はし一名いよ十六日じゅうろくにち梯はし存ぞん隊たい團だん松しょう山さんまのま正月しょうがつ中なか旬じゅん小ちひ必かならず開ひらくちひなりひ早はや瓣はな小ちひ花はなありちひ近ちか本もと花はなよりと又また

不

櫻品

八

他邑（他邑）種ありそしを種（種）く又（又）華（華）茂（茂）と
 蘇州（蘇州）廣（廣）寧（寧）ありそ播州（播州）の石ありそ
 毛氏（毛氏）其（其）つもく不斷（不斷）橋（橋）とく名（名）く皆（皆）一物
 あり其（其）花形（花形）彼（彼）及（及）以（以）波（波）女（女）橋（橋）小（小）似（似）り
 花（花）表（表）生（生）に（に）と元（元）前（前）后（后）ふもそは花（花）開（開）
 四（四）時（時）不斷（不斷）故（故）よ去（去）人（人）不斷（不斷）橋（橋）とよふ接（接）ふ
 是（是）乃（乃）宋（宋）陸（陸）游（游）老（老）學（學）子（子）庵（庵）筆（筆）記（記）小（小）謂（謂）要（要）

小桃（小桃）紅（紅）是（是）也（也）周（周）仙（仙）花（花）と名（名）氏（氏）曰（曰）くお異（異）
 あり熊（熊）谷（谷）橋（橋）もけ種（種）類（類）也（也）歐（歐）陽（陽）公（公）梅（梅）宛（宛）
 陵（陵）王（王）文（文）恭（恭）集（集）皆（皆）小桃（小桃）の詩（詩）あり歐（歐）陽（陽）
 の詩（詩）よ云（云）

雪（雪）上（上）裏（裏）花（花）開（開）人（人）未（未）識（識）摘（摘）來（來）相（相）顧（顧）其（其）
 驚（驚）疑（疑）便（便）須（須）索（索）酒（酒）花（花）前（前）醉（醉）初（初）見（見）今（今）
 年（年）第（第）一（一）枝（枝）

初但謂桃花有一種早開者耳及遊成
都始識所謂小桃者上元前後即著花
狀如垂絲海棠曾子固雜識云正月廿
開天章閣賞小桃正謂此也

とやうり又伊勢白子觀音寺の庭に櫻
あり曰李小花を貼不斷様と名付彼
地の人小彷彿とるふぬ石及廣野の櫻と

一お之揚升庵丹鉛抄録陸游老學子庵
筆記に載す取正よけおを括く小桃と
小桃ぬもやうり桃花の種ぬもあはに
實小櫻中の一品ありと小花のもの也
又一種花月とて二度櫻といふものも一
小の夜度開くを不の後の類也
○張永曰此花園を名ふ不斷様といふ

一のり須摩若木の梅のう美極あり
 まよりの秋まどく花開冬に花あり夏も六
 月はよ若芽少く梅よ花咲紫花
 まよの山梅よりあり花咲く夏花早辨
 少梅あり紫少く枝も少くさるる
 あり梅より花咲く冬又ハまよの四季
 とも花開く一株の心よ若芽あり梅花あり

若花のよ若芽あり梅花あり駿州よ
 け類ありふき又右節梅一名十六日梅
 け若豫明のふく小梅あり四季あり
 咲く正月十六日梅あり梅あり梅あり
 那山新村竜音の山梅ありありあり

標品

○ 誅考櫻

○ 山石石 ○ 正宗 ○ 関山 ○ 麒麟

○ 猩々 ○ 蓮

追る考ふべし

○ 怡顏齋曰け諸名をくくく標の名
少ありに或は似たり名付ありは
を處を以てく名付るものありく一様小
あど但古人歎き孫むる所く似るその
標の名あり故係たふ標と

○ 志元惠心萬葉草木異名

標品

〇八一九

櫻品

ノ...

○あな桜。あさ桜。くらげ桜。あや桜。
 ○見桜。め桜。夜桜。うさ桜。
 ○月桜。深桜。お桜。くらげ桜。
 ○まろ桜。うさ桜。庭桜。いりて桜。
 ○志人桜。花桜。林桜。ささ桜。
 ○玉桜。くつろ桜。ごぼろ桜。卯月桜。
 ○くろく桜。六月桜。

○夫ふがくしうふいづる木集出櫻名

かあろ桜

信實

かあろ桜にあの桜庭西ふかつく色のあふらん

武吉山桜

公朝

えうぬ河也漕ゆくみまに雲がほむじ山櫻今ゆかり

斤山桜

全

あふぬまの斤山桜あふらんあふらんあふらん

櫻品

ノ...

あらし山梅

全

あらしの山梅咲けり梅のうのまが白雲

岩舟梅

後九条四入長

玉川や岩舟梅あらしの梅も花あをけり

しし梅

知家

あらしの山梅あらし梅の心を梅の心

姨捨梅

具親

あらしの秋姨捨の山梅月を花のありあはるの頃

尾越梅

洞院梅政

あらしの山梅あらしの梅花咲けり

伴駒梅

為家

あらしの山梅あらしの梅花咲けり

夕山梅

行家

あらしの山梅あらしの梅花咲けり

中川渡梅

為家

あらしの山梅あらしの梅花咲けり

櫻品

山岸桜

後惠

風流のしるしありて通の里家の桜ありしもの
若桜

顯季

花を根より挿しおの桜咲かすりて月吹ぬまふ

以上

○櫻の名ありて櫻の何れも類

○名ざくら

一名ざくら
詩經棠棣一、枝移

○下子像

一名紫源氏
本州綱目ニ其花

○庭梅

農圃六書ニ喜梅

櫻品

二七二

櫻品

○活所公羽檮護上庭檮（花）より（草）の
ご〜花小く千瓣（花）盤谷檮（花）より（草）り
又檮の二類也其花用く（花）檮（花）より（草）り
あり（花）檮（花）

櫻海棠

沉立海棠記（花）杜海棠（花）

計余畧之

跋櫻品後

正徳中吾先大人撰七十二品而櫻
品與焉而吾之不良廢其業而不講
加之日以就懦矣其書束而閣之錯
亂不收語曰厥父蓄其子乃弗肯
播徃吾讀之而馬耳今則忸怩曰於

櫻品後

乎何其言之似我事也然終於此而已矣無之能改也櫻品之作始出四羅山閣齋二先生與那波道圓之說次之以其所輯者鈍永子知吾無能爲也於是就其錯亂者采而次之其不足者修而飾之各出圖以示焉

使余書其事余曰是吾之不良幾乎父之蓄就蓋哉是罪之大者也而子爲我播而使黍若稷苗穗離々則吾之不良猶且耻之雖然微子將墜先人之業焉刻成吾聞之喜而不寐遂書以謝之

櫻島

寶曆丁丑夏五月之吉連城山
人男松典百拜書



明治廿四年一月 求板
同 廿四年三月 印刷

著者 怡顏齋 松岡玄達

京都市寺町通四条上九十八番戶

發賣者 文求堂 田中治兵衛

東京市日本橋通壹丁目

發賣所 錦榮堂 大倉孫兵衛

大坂市心齋橋筋壹丁目

同 文海堂 松村九兵衛

